私学高等教育研究所より

パラダイム転換

教員から学生へ、教育から学習へ

日本の大学でもパラダイム転換の動きが活発になっている。今年六月、東北大学で開催された大学教育学会第三五回大会の統一テーマも「教育から学習への転換」であった。パラダイム転換は、大学教育に何をもたらすのか。アメリカの「教育から学習へのパラダイム転換」は、一九九五年頃から始まった。これは、高等教育専門雑誌『Change』に「教育から学習へ～高等教育におけるパラダイム転換～」と題して発表されたRobert B. Barr & John Tagの論文に端を発したものである。同論文の日本語訳については、雑誌『主体的学び』（主体的学び研究所、創刊号、二〇一三年、東信堂）を参照。この論文は、従来の「教育パラダイム」における大学の取組みを批判して、大学の目的は学生の学習を生み出すことで、教育課程や授業改善は手段に過ぎないとした。その上で、学生の学習を生み出すことを目的とした「学習パラダイム」に基づく大学教育の改善を提唱した。このパラダイム転換で大学教育がどのように変わったかについては、図表「教育パラダイムとの比較一覧」を参照。中教審答申も大学教育の質的転換を促しているが、これもパラダイム転換を示唆するものである。アメリカのパラダイム転換には二つのレベルがあるとPOD元会長ディー・フィンク博士は述べている。一つ目は、個々の大学レベルにおいては良い教授法を推進するだけでなく、どのように優れた学習を促進できるかという視点に立ったものである。二つ目は、認証評価機構のような大きなレベルの動きである。すなわち、彼らの主張はアメリカの認証評価機構の基準にも影響を与えた。それまでは、大学の資金は十分か、教員は高い学位を有しているか、教育方法の研修を受けているか、図書館の蔵書は十分かなど、インプットの側面が重視された。しかし、これに加えて「高い質の学習がどのように行われているか」が問われるようになった。そのため、大学は認証評価機構に対してどのように対応しているか証拠資料の提示が求められ、改善のための具体的な手続きを説明する必要がある。すなわち、インプットに加えて学習成果（ラーニング・アウトカム）が求められている。このような動きが表面化していることは、パラダイム転換が生じている証である。アメリカでは大学そして認証評価機構においても教員から学生へ、教育から学習中心へのパラダイム転換が断続的に行われている。

土持氏

中教審答申でも能動的学修（アクティブラーニング）を起点として、大学の質的転換を目指している。その結果、多くの大学で学生の主体的学びを促す能動的学修を学士課程教育において促進するために、ディスカッションやディベートといった双方向型学修や自らの課題に取り組む問題解決型学修を中心とした授業への転換が行われている。しかし、能動的学修は双方向型授業やグループ活動だけに限定されるものではない。どのような授業形態でも能動的学修は可能である。フィンク博士は、能動的学習を三つに分けて説明している。一つ目が「情報とアイデア」によるもので、情報あるいはアイデアを何らかの方法で、講義、本や文献によって得られる。二つ目が「経験」から得られるもので、何らかの行動を伴うことでより能動性が生じる。ここでは現実あるいは生活における経験が必要になる。このような行動は、必ずしも、物理的な行動を指すのではなく、知的な行動のことである。例えば、分析して質問をしたり、質問に答えたり、問題を解いたり、決定を下したりする行動である。三つ目が「省察」と呼ばれるもので、二つの振り返りから得られる。一つが主題に対するもので、例えば、地理学などの授業では多くの文献を読み、用語集を作り、主題に関する事柄を集めて小論を書くということである。もう一つが「学習プロセス」について振り返るもので、一般的ではないが最も重要であるとフィンク博士は主張している。学習プロセスを振り返り、自らに問いかけるものである。例えば、何をうまく学べたか。どのように学べたか。それは読書からか、実行からか、あるいはそれ以外から学んだものか。何が学習を助けたかあるいは妨げたか。学習者としての自分にどういう意味が見出せたかなど、これらが学習プロセスへの振り返りである。これをジャーナル日誌やラーニング・ポートフォリオを通して繰り返すことで、自らの学習パターンに気づき、さらに学習についての理解を深め、学習者としての自分を理解できるようになる。そこでは単なる学習者ではなく、「メタ学習者」となる。すなわち、単に地理学を学んでいるのではなく、学習について学んでいることになり、自律的な学習者となる。そのためには、時々、立ち止まり、学習プロセスを振り返る必要がある。これが中教審答申の生涯学び続け、主体的に考える力を育成することにつながると考えている。

教育パラダイムとの比較一覧

教育パラダイム	学習パラダイム
使命と目的	
・教育を提供／伝授する	・学習を生み出す
・知識を教員から学生に移譲する	・学生から知識の発見や考えを誘い出す
・コースやプログラムを提供する	・強力な学習環境を創造する
・教育の質を改善する	・学習の質を改善する
・多様な学生のアクセスを可能にする	・多様な学生の成功(成果)を可能にする
成果の基準	
・インプット、資源	・学習と学生の成果の結果
・入学する学生の質	・卒業する学生の質
・カリキュラム開発と拡大	・学習技術の開発と拡大
・資源の量と質	・成果の量と質
・在籍登録者数と収入の増加	・集合的学習の伸びと能率
・教員と教育の質	・学生の学習の質
教育／学習の機構	
・原子論的～全体よりも部分重視	・全体論的～部分よりも全体重視
・時間は一定に保ち、学習は変動する	・学習を一定に保ち、時間は変動する
・50分講義、3単位コース	・学習環境
・クラスは一斉に開始／終了する	・学生の準備ができたとき環境の準備ができる
・一クラスに教員が一人	・学習体験がうまくいくなら、なんでも可能
・独立した学問分野、学部	・学習分野や学部を超えた協同
・教材をカバーする	・規定した学習成果をあげる
・コース終了時の採点評価	・開始前／中間／終了後の評価
・クラス内で担当教員による成績評価	・外部による学習の評価
・プライベートな評価	・公的な評価
・学位は単位時間数の累積に相当する	・学位は、証明された知識及び技能である
学習理論	
・知識は"外に"ある	・知識は一人一人の心の中にあり、個人の体験によって形成される
・知識は指導者が伝授する"塊"や"断片"で現れる	・知識は構築され、創造され、"取得される"
・学習は累積で直線的である	・学習は枠組みの重なりで相互作用である
・知識の倉庫という喩えに合致する	・自転車の乗り方を学ぶ喩えに合致する
・学習は教師中心に管理される	・学習は学生中心に管理される
・"活気ある教師"、"活気ある学生" が求められる	・"積極的な"学習者が求められるが、"活気ある"教師は不要
・クラスルームと学習は競争的で個人主義的である	・学習環境と学習は協力的、協同的、助け合いである
・才能や能力はわずかである	・才能や能力があふれている
生産性と資金配分	
・生産性の定義～学生一人当たりの指導時間に対するコスト	・生産性の定義～学生一人当たりの学習単位に対するコスト
・指導時間数に対する資金配分	・学習成果に対する資金配分
役割の性質	
・教員は主として講義者である	・教員は主として学習方法や環境の設計者である
・教員と学生は独立して別々に行動する	・教員と学生は一緒に、あるいは他のスタッフも加えてチームで活動
・教師が学生を分類し選別する	・教師は学生それぞれの能力や才能を引き伸ばす
・スタッフは教職員と指導過程を援助／支援する	・スタッフ全員が、学生の学習と成果を作り上げる教育者である
・専門家は誰でも教えることができる	・学習力を高めることは骨が折れる、複雑なことである
・直線的管理～独立した役者たち	・共同管理～チームワーク

出典：ロバート・B・バー＆ジョン・タグ「教育から学習への転換学士課程教育の新しいパラダイム」「主体的学び」（創刊号、2013年）（東信堂）（"From Teaching to Learning? *A New Paradigm for Undergraduate Education*", Robert B.Barr & John Tagg, 1995, *Change: The Magazine of Higher Learning*, Volume 27, Issue 6, pp.12-26.）